



首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察 (下) :
忘れ草,枕を欹つ,琴の声と五節,這ひ渡る

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学札幌校国語国文学科 公開日: 2012-01-26 キーワード: 作成者: 中島, 和歌子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00007170 |

『首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察 (下)

— 忘れ草、枕を欹つ、琴の声と五節、這ひ渡る —

中 島 和 歌 子

はじめに

本稿は、一竿斎(松永貞徳もしくはその門人か⁽¹⁾)著、寛永十七年(一六四〇)六月跋、寛文十三年(一六七三)二月刊の『首書源氏物語』(以下『首書源氏』とする)の須磨巻後半⁽²⁾の首書(かしらがき、一面の上半分の頭注部分)及び傍注(後継者である『湖月抄』に比べると非常に少ない)を翻刻したものである。下段の本文(青表紙本系統)は省略した⁽³⁾。テキストには、大阪女子大学附属図書館蔵本の影印である、坂本信道氏編『首書源氏物語 須磨』(和泉書院、一九九四年、補注・解説付き)を用いた。

また、その範囲内の解釈上の問題点に関する四つの管見を付したが、『首書源氏』そのものについての考察ではないことをお断りしておく。

翻刻に当たっては、以下の通りとした。
イ、改行箇所は本のままとした。

ロ、丁数と表・裏を、ゴシック体の算用数字と「オ・ウ」で示した。

ハ、漢字は全て新字体を用いた。異体字や俗字の場合も、現行の字体に換えた。

ニ、漢字の踊り字は、本が「く」の場合はそのままにした。

一方、「々」と翻刻した箇所は全て本は「々」である。

ホ、抄出された諸注釈書、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』『孟津抄』『紹巴抄』『万水一路』『或抄』の略号(漢字一字か二字)には、「一」を付した。

ヘ、傍注は*印を付し、本文の被注箇所(注の左横)を抜き出して見出しとし、頭注の間に挿入した。本文を傍注の左横よりも上から抜き出した場合は、その部分を()で括つた。本文の下の「」は、下段における行数である。傍注の下の()は、繋がりを示す為に補った本文である。

ト、傍注のうち「ナシ」と記したものは全て本は「\」という記号である。

一、『首書源氏物語 須磨』後半の頭注の翻刻

○おはすへき所は 【河】古今 田村の御時にことにあたり

てつの国すまと云所にこもり侍けるに宮の内に」25才

侍りける人につかはしける在原行平朝臣わくらははに

とふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

○かや屋とも 【弄】此所にもとよりかゝる体の屋な

とありしと可見

○らうめく屋 【万水】廊のやうなる屋也

○かゝるおりならずは 【弄】罪なくして配所の月

を見はやといへるに似たり

【細】たこの身にて見侍らはいかにおもしろからんすらんと也

○みさうのつかさ 【細】御領の者とも也

* (よしきよの朝臣) など [12行目] ナシイ

○良清の朝臣 【万水】前播磨守か子也

【或抄】良清か分際よりは下の役なるへしおほせは」25ウ

課役の心也

○うへ木とも 【細】末の詞に春秋の花の事あり

○うつゝならず 【孟】しつまりてさらにとにや

○国のかみも 【細】撰津国守也

【或抄】源氏の家来也

○はかくしく 【或抄】雑々の人は多けれとも源氏

の物の談合をもし給はんほとの人をなしと也

*しらぬくにのこゝちして [10行目] 源氏心

○しらぬ国の心ち 【或抄】異国に來りたるやうに思ひ

給也むもれいたきは打うつもれ心のはれくとも

なき心也くつしいたきと云に大かた心同歎」26才

○おほしやらる 【或抄】ゆく末の事思やらるゝ也

○長雨のころに 【細】夏に成て也

【或抄】五月雨の空のはれくともなきに打むかひ

て一しほ都こひしくおほさるへし

○女君の 【細】紫上也

○二条院へ 【花】紫上への歌は物語にのせずゆへある

へきにや但紫上の返事は下に見えたり

○くらされ 【万水】涙にくるゝなるへし

○宮には 【或抄】藤つほへの御歌也

○松しまの歌 源氏也 【細】大かた長雨のつれく

なるを思やり給なるへし花鳥ついちなともくつ

れぬらんのさたまてはあまりにくたくしき歎

【巴抄】入道宮なればあまのとまやといへり心は明也」26ウ

○みきはまさりて 【花】君こふる涙おちそひ此川の

汀まさりて思へら也貫之

【細】是まで文の詞也引歌よくかなへり

○内侍のかみ 【孟】朧月夜也

○例の中納言 【細】朧月夜の女房也

【万水】まへく此人心しりと云心也中納言への文に

まさらはして朧月夜への文ある也

○つれく 【細】是より文の詞

【万水】詞より歌にかゝると見るへし

○こりすまに歌（ハナ） 【河】白波は立さはくともこりすまの

浦の見るめはからんとそ思ふ

【細】源氏のかたよりはこりすまにこひしきをそなたは

いかにと也又は中納言のかたへの文なれば此人もいかにと也

いかさまに塩やくあまとはむかひをさしていへり

【或抄】すまにてなればこゝのうら人もいかゝとはち給心

ならん歟

*（ゆかしき）を〔8行目〕にイ

*さままゝかきつくし給ことのは〔9行目〕地也

○大とのにも 【或抄】左大臣殿也宰相の乳母は

夕霧の乳母也夕霧をもりそたて奉れなど、

かきてつかはしたる也」27才

○二条院の君は 【或抄】紫上也源氏の打立給て已後

かなしひにたへす打ふし給たる也

○こしらへわひ 【或抄】きけんをとりかねたる也

○もてならし給し調度 【或抄】何にても源氏御手

に持ならし給たる道具也

【孟】こゝもと句を切へし面白詞也

○今はと世になく 【或抄】なき人のやうに源氏を

したひ給也 【孟】死別より生別は悲ふかきゆへ也

○かつはゆゝしう 【万水】少納言かいまゝしく思と也

○僧都に 【弄】北山の僧都也」27才

○ふたかたに 【細】紫上の御心をなくさめんのれう

又源氏の帰京をいそぐへき事也

○かつはかくおほし 【万水】僧都の心也

【或抄】僧都の祈の意趣をいへり源氏の帰京さへ

あれは紫上の思ひはなかるへし

○御とのる物 【或抄】旅にて用る夜物など也

○かたりの御なをし 【細】平絹也今源氏除名せら

れたるゆへに無官なれば也さるゆへにさまかはり

たるとはいへり

【弄】直衣指貫の地の事也夏秋は直衣年齢に

よりて薄色浅黄也冬白也指貫も年によりて

浅黄浅深有也 一勘

*さままかはりたるこゝちする〔8行目〕紫上心

○さらぬかゝみと 【細】まへに有し源氏の歌の事也

○出入給ひし 【細】まへのもてならし給ひし御てうと

とも引ならし給し御琴ぬき捨給へる御そと

ありし詞にかけて見る也 【河】六帖 わきもこか

きてはよりゐしまき柱そもむつましやゆかりと思へは」28才

○むねのみふたかりて 【万水】此詞ふたかりてとよみ

きりてさて物をと下へつけて見侍へし

○世にしほしみ 【細】紫上いまた世に物なれ給はぬ

御よはひと也

○ちゝ母にも 【或抄】紫上十はかりの時より源氏

の養育し給たる也

○ひたすら世に 【万水】源氏の一向になき人にてまし

まさは不及力して中々忘れもせんにと是は
わすられぬとの心也

○やうく忘草も 【河】こふれともあふよのなきは

忘草夢路にさへやしけるらん古今

○さくほとは 【細】此撰津国の須磨など云はた、打

さくには程近き所なれと帰給期なき由也

○いつまてと限ある 【花】別てはいつあひ見んと思ふ

らんかきりある世の命ともなし」28ウ

○つきせすなん 【或抄】紫上のかなしひはつきぬと也

○春宮の御事に 【或抄】春宮の御ためには無二の

御後見と頼給たる源氏のかく成給へれば歎給也

○いとさら也 【万水】ことさら也と云詞也

○御すくせの 【或抄】入道宮と源氏との御契りの事也

春宮の出生し給たる事を思へは浅からぬ宿世

と思給へしと也こ、もと入道宮の御心をいへり

○年ころはた、 【花】是より下の一段は入道宮と源

氏との御なからひの事也たかひに物のきこえをは、

かりてめやすくもてかくし給へる事也

○すくくしう 【河】健々

○かはかりうき世の 【細】源氏密通の事をは世に云

出る事なきと也人ことは人言也」29オ

○やみぬるはかりの 【弄】いひ出るはかりのはなといへる

心なるへし大やうにいひ残したりそのゆへは人の

御おもむけもとは源氏の心つかひをいへり

* (御) をもむけ [2行目] 心イ

○かつはめやすく 【細】源氏もよく忍び給ひしはかし

こしと也

○哀に 【細】草子地ことはる也かやうなるゆへに

薄雲も源氏を哀におほすへきと也

○御返りも 【或抄】入道宮の御返事也

○このころは 【細】文の詞

【孟】詞より歌にかゝりて見るへし

○しほたる、歌 入道宮也 【河】後拾遺 秋までの

命もしらす春の野の萩の古枝をやくとやく哉

【花】塩を焼を役の字にとりなしたる詞也なけ

きは塩木によそへたり

○かんの君 【或抄】朧月夜の返事也

○うらにたく歌 【花】風をいたみくゆる煙の立出て

なをこりすまのうらそかなしき

【細】塩やくあまやいか、思はんとある返事なれば

そなたは塩焼けふりにもまかへ給へきを我身」29ウ

のかたはさやうにまかはすへきけふりもなきの由也

○さらなる 【細】是まで文の詞也

【孟】此さらなるに心をつけて可見と云々幽にして意

ふかし

○おほしなげくさま 【万水】中納言のかたより朧月夜

のさまをいひたるへし

○哀と思ひ 【万水】源氏の心也

○姫君の御文は 【細】 心ことにこまかなる御返りなれば

とあるにて源氏より文あるよし見えたり事しけ
きゆへに此物語にのせさるへし

○浦人の歌 【細】 紫上独寝のさま也又はた、今と

のぬ物なとくたし給よせも下心に有へし

○物の色 【細】 くたし給衣裳をいへり

○何事も 【細】 紫上を可然人とおほす也」30才

○今はこと事に 【細】 今は心しつかにてわくる心
もなくして有へき物をと也

○なを忍ひてや 【細】 紫上を忍ひてもむかへはや
とまておほす也

○やかて御さうし 【河】 聖廟宰府御下向之後不断

御精進にて朝夕法華經を令転読給けり云々

○大との、若君 【細】 夕霧也

○をのつから 【細】 つゝにはあひ給へきと也

【或抄】 男子なればたとへすまに年へ給とも自然」30ウ
あひ見給はん事やすかるへき也

○たのもしき人 【細】 祖父祖母まませは心
やすしと也

○中／＼この道の 【花】 此道の子の道とかける也

若君の御事也 【細】 人の親の心はやみにあらね共

と云にかはれり夕霧の事よりは紫上の心もと
なきと也夕霧はたのもしき人／＼もあまた侍る故

也恩愛の中には夫婦の中一段大切なるよし也

* (まどはれ) 給は (4行目) ナシイ

○まことやさはかし 【万水】 夕霧の事をはさはかしき
まされにもらしたるとはまことにやと云也これ
又彼筆法也

○かのいせの宮 【細】 六条御息所也

○かれよりも 【或抄】 伊勢よりもすまへ御使ま
いる也ふりはへはわざと也

○ことのは筆つかひ 【細】 御息所をほめたる也

○なをうつ、とは 【細】 御息所の文の詞

○あけぬよの 【花】 夢のやうなると云心也」31才

○さりとも年月は 【細】 やかて立帰給へきと也

* (とし月は) へだて (2行目) 経イ

○つみ深き 【細】 我身の事也花鳥齋宮にては仏

經に手をふれぬ事を罪ふかしとは云と云々如

何た、我身のよろつに思しつみたる心なるへし

○きこえさせん事も 【或抄】 齋宮帰京はいつとも
はかりかたしと也

○うきめかる歌 御息所也 【細】 すまにていせのあま
をもおほしやれと也

○なをいかに成はつへきにか 【細】 是まて文の詞

○いせ嶋や歌 是も御息所也 【弄】 我身也けりと

よめるに源氏は定而帰洛し給事もあるへしと云
心あり 【細】 結句いひつめたる面白し源氏はかきり

有て帰給へし我身ははてしなきよし也」31ウ

○うちおきく 【或抄】御息所の文の長く成たるさま

見えたる也

○哀に思ひ 【細】源氏の心中也御息所を哀に思ひ

○一ふしうしと 【花】葵上の事也

○心あやまり 【或抄】うきに思ひはてたる心あやまりと也

○今にいとおしう 【或抄】御息所の心中を今にせうしには思給也

○二三日すへさせて 【万水】逗留させられたる也

【或抄】居字也」32才

○かしの 【或抄】伊勢の物語をさせてきこしめす也

○わかやかに 【細】御息所の御使也

○かき給ことのは 【万水】草子地也

○かく世を 【細】文の詞也かやうに有へき事と

かねてよりしり侍らは齋宮へ御供申ていせへ

くたるへき物をと也歌も此心也

○つれくに 【或抄】源氏の心ほそきまゝに文を

こまかにかき給ひ歌をも一首ならすよみ給

と也此一句は文の詞にはあらず物語の詞也」32ウ

○いせ人の歌 源氏也 【河】いせ人はあやしきものそ

など、いへは小舟にのりて波のうへこく 風俗伊勢人

【或抄】いせへくたり給たりとも此すまのうらほと
うき事はあるましき物をと也

○あまかつむ歌 是も源氏也

【細】我身もいつともしらする也

○きこえさせん 【或抄】対面に物をもの給はん事

いつともなしと也

○つきせぬ心ちし侍れ 【細】是まで文の詞也

○かやうにいつこにも 【或抄】都の事はいふに不及

いせまでも文をはかきかはし見給也

○御心く 【或抄】花散里のみならずこなたか

なたの文ともを御らんするにそれくの心く

文に見えたる也

○めなれぬ心ち 【万水】めつらしく思給よし也」33才

○あれまさる歌 花散里也 【細】此歌の体にて花

散里の心見えたり打むきて古郷の体をいへる

哀也下句深く源氏を思心見えたり大かたの人

ならば源氏の羈旅の御住居もいか、などあるへき

をさも侍らさる類なく見え侍り

○むくらより外の 【河】八重むくらして門させりて

への歌の心也

○ついち所く 【或抄】花散里の御方のついちくつ

れたるとき、給て也

○かんの君も 【弄】朧月夜も出仕をと、めさせ

給と見ゆ」33ウ

○おと、いとかなしう 【細】二条大臣也朧月夜は大臣の

愛子なれば也

○せちに宮にも 【万水】悪后へも御門へもかんの君

の事を御侘ことある心也

○かきりある女御 【細】女御などにてもなければとてなり 【或抄】尚侍は私に夫をも持也されは女御又

御息所など、云女官にてもなければおもてむき

の女官と思ひなしてゆるし給と也

○又かのにくかりし 【巴抄】源氏をつみにおこなはんゆへにこそと也

○なを心に 【細】源氏の事を朧月夜はわすれ給はぬ也

○いみしかりし 【万水】朧月夜に深き御思ひの名

残なれば人のそしりをもしろしめされぬと也

○例のうへに 【或抄】まへくのことく御寵愛也 34才

○御さまかたちも 【孟】朱雀院の御事朧月夜の心也

○思ひ出る 【細】源氏の事を内侍のかみはわすれ給はざる也

○心の中そ 【或抄】朧月夜の心中を地より云也

源氏には思ひおとし給心中おそれかましきと也

○その人の 【細】勅定也源氏の御事をの給出也

○院のおほし 【細】先皇の御心にもたかひたる也

【弄】前の巻に院の御遺言ありし事也

○つみうらんかし 【或抄】御遺言をそむきてつみをやえんと也 34ウ

○えねんし 【万水】天子の源氏の事をの給てなみたくみ給へは内侍のこらへかねて涙をおとし給さま也

○世中こそ 【細】御門の御詞也

○久しく世に 【或抄】位をもさり御遁世もとおほしめす也

○ちかきほとん 【細】源氏の別にはおとるへきと也

○いける世にとは 【河】拾遺 こひしなん後は何せんい

けるよのためこそ人は見まくほしけれ

○よからぬ人の 【細】つぎさまの人と也さしもなき人のいひ置し事と也後世をこそかけて契るへき物をと也花鳥よからぬ人とは中のよからぬ人と云々如何

○ほろくと 【弄】朧月夜の涙也

○さりやいつれに 【細】御門の御詞也わか御ためか

源氏の御ためかと也 35才

○今まで御子たちの 【細】是も勅詔也此時まで

は今上も御誕生なき也朧月夜の御腹に御子もなきと也

○東宮を院の 【細】春宮を朱雀院の御猶子

にさせ給て位をゆつり給へと桐壺の帝の御遺言ありしと也

○よからぬこと、も 【細】此春宮を除て八宮を立

給へきと也弘徽殿の造意也宇治にいたりて

見えたり私勸漢高祖八男あり其中淮南厲王をは呂后の母として養之後に謀反の心

ありし人也此八宮可准之歟
○世を御心の外に 【万水】悪后右大臣などの御門の御

心の外に世中をはからひ給へとも御門のつよき所
おはしまさぬ御心にてまかせ給なから御こゝろに
あはぬとの心也

○すまにはいと、【細】秋にもなると也

○海はすこし【細】まへに海つらはや、入て哀に心すこ
けなる山中也とありさて海は少とをきと云也

○せき吹こゆると【或抄】続古今 つの国すまと云所に

てよみ侍ける中納言行平 旅人の袂涼しく成に
けり関吹こゆるすまの浦かせ此歌と可心得花鳥に

忠見か歌を出し奥入伊行尺ハヤシなどのあやまりを沙」35ウ

汰するによりてむつかしき事出来せり行平の歌

顕然たるうへは外を求るに可不及乎

○かゝる所の【或抄】所はすまの浦といひ配所の秋の
哀深かるへし

○枕をそはたて、【花】白楽天詩遺愛寺鐘欵

枕聴

○まくらうくはかりに【河】躬恒 ひとりねのところに
たまれる涙には石の枕もうきぬへら也

【花】なみた川水まさればやしきたへの枕のうき
てとまらさるらん

○こひ侘て歌 源氏也【巴抄】都の事を思時分琴
の音に都の方の風かよふかと也【細】京極黄門

袖にふけさそなかりねの夢も見し思方より

かよふ浦風とよめる此歌を思へるなるへし」36才

○うたひ給へるに【万水】此歌を詠吟し給也

○あひなう【弄】あちきなきなるへし

○はなを忍ひやかに【或抄】なみたの事也わたす
といふは一人にはあるへからすこゝにさふらふ人くも也

○けにいかに【弄】源氏の心に祇候の人をあはれみ
給也人くは源氏の事をかなしひ奉る也

○いとかく思ひ【万水】源氏につよくかなしひ給は、
人くもいよく物わひしからんとうきなからさのみ

つらからぬさまにてまきはし給と也

○ひるは何くれと【細】人をなくさめんの心にて

かくし給也」36ウ

○さまくのゑとも【細】此絵のちに絵合に出たり

○人くのかたり【細】若紫巻にいかに御絵いみし
くまさらせ給はんといひし事也

○けにおよはぬ【或抄】心も及ひかたき磯の有
さまをありくとかき給たる也

○千枝常のり【細】千枝常則皆絵師也

河委

○つくりゑ【細】源氏の今かき給は皆墨絵なれば
今別に彼絵師ともに色とりのゑをか、せて」37才

見せ奉らはやと也 河海説いか、

【河】つくりゑとはすみかきの上を彩するを云也源
氏のか、れたるゑを彼輩に色とらせはやと也彩色

は画師の口伝ある也云々

○ちかうなれ 【万水】都にてはかほとまで常に御身

近くまいらぬにすまにては近身するをうれしきと也

○せんさいの花 【或抄】秋の草花をもうへられたるへし

○所からはまして 【或抄】源氏の御かたち此すまの

ゐ中には不相応なればた、天人などのやうに

思はるゝと也

○白きあやの 【花】河海に白き綾の御衣に紫苑

色の指貫とのせられたりさも有ぬへし又紫苑色

もおなしく御衣の色ともいはんに相違あるへからす

きぬとは色くをかさねてきるゆへ也こまやかなる」37ウ

御直衣は夏の直衣地は平絹の無文にてもあれ

色は紫花田年齢によりて用也花田ならば色

こきをこまやかなると云へし

○尺迦牟尼仏弟子 【弄】金剛仏子某など云ことく

の心也 【或抄】四部の弟子也優婆塞の心也

○ちいさき鳥の 【河】日本紀をひけり略之河委

【或抄】舟をとりなたとへたる事万葉歌などお

ほし不可勝計

○かりのつらねて 【弄】雁陣易迷秋嶺上

鳧舟難弁夕陽中 此詩の心にななへり

【花】雁槽といひて雁の声をはからるをす

にたとへたりかちの音も同事也」38才

* (なぐさみ) けり [2行目] に (けり) イ

○初かりは歌 源氏也 【細】雁の声のかなしきは是

も我こひしく思人の類也と云々又云待人にあらぬ

物から初雁のけさなく声のめつらしき哉此心に

ても有へしかなしきとはこゑを聞てかなしひを

まし思をもよほす故郷の人に類する由也

空とふは空飛也

○かきつらね 良清歌也 【巴抄】心明也

○民部大輔 【細】惟光也こゝに初て民部大輔

とは見えたり

○心から歌 惟光也 【河】常世国トコヨノクニ日本紀蓬萊山同

河委下略 【花】とこ世とは仙境をいへり春秋の

かはりもなきによりて常世とはいへり下略

【細】我今旅の身にて云也旅雁を年月は我心から

なるとよそに思しも今は我身の上也けるよと也

○さきの右近のせう 【細】かりの隨身にてありし人也

○とこ世出て歌 【巴抄】源氏にをくれすそひ奉る

にてなくさむと也 【或抄】つらとは一列也惟光」38ウ

良清などをいへるなるへし友まとはしても此人くを

さして云也

○友まとはしては 【花】友をうしなふ心也歌の詞

なるへし可考之 【巴抄】こゝに有ともまとはしてはと也

○おやのひたちに 【細】源氏によく相隨奉る人也

【或抄】伊与介イマノケなりしか伊与の任はて、又常陸介に

成たる也右近のせうは常陸へもくたらす身を捨て

源氏にしたかひ奉る也

○したには 【或抄】 下心には心をくたき思ひ有

ぬへけれども源氏をいさめ奉らん為に思のな

き体をしてある也

○こよひは十五夜 【或抄】 八月十五夜也 河海抄の

一説に紫式部此物語の事を承て石山寺に通夜

して此事を祈申処に折しも八月十五夜の月湖

水にうつりて物語の風情うかひければまつすま明石の

両巻をかけりさるによりすまの巻にこよひは十五

夜也けりとありといへり此詞也

○月のかほのみ 【河】 月顔似鏡無明罪風氣

如刀不伐愁昔家後集 39才

○二千里の外 【河】 三五夜中新月色二千里外故人

心 此詩者白楽天八月十五夜禁中に独直して

対月寄元慎四韻の一句也今夜殿上の昔の遊

を思出て此句を誦せられける尤有悲致乎

*涙もとゞめられず 【2行目】 祇候の人くくの涙也

○霧やへたつる 【細】 櫛巻にありし事也

○おりくの事 【或抄】 配所の月に対して過にし方

の事ともその時かの時なと思出給へし哀也

○よ、となかれ 【花】 角総巻にもさくりもよ、と泣

と云詞あり 【或抄】 夕顔巻にもありつよく泣也

○夜ふけ侍りぬ 【弄】 源氏の月を見給を入給へと

いふへきにあらす物思ひ入給へるをなくさめ奉也

○見るほとそ歌 源氏也 【細】 月を見るほとそ

と也旅懐をなくさむる心也都の事也月宮に
よせてよめり

○その夜 【万水】 是も櫛巻に源氏内へまいり給時

齋宮の御事御息所の事たかひにかたり給しを

今思ひ出給也 39ウ

○をんしの 【河】 去年今夜侍清涼秋思詩篇独

断腸恩賜御衣今在此捧持毎日拜余香後集

○御そはまことに 【細】 源氏の御衣を賜事あるへし

此物語の例ふと書出してやかて実事になる

類あまた所にあり

○うしとのみ歌 源氏也 【細】 我身かやうに成ても

上へ恨はなき也されと又時としてはうらめしき事

もある也さて左右とはいへり

○その比大式は 【細】 五節か父也花散里に五節

君に源氏あひ給事見えたり父の任果て上

洛する也

○るいひろく 【河】 類広也

○うらつたひに 【細】 くかをのほるも有へし

○外よりもおもしろき 【或抄】 すまの事也 40才

○わかきむすめ 【或抄】 大式むすめおほき也

五節君のはらから也

○さんのこゑ 【或抄】 おりふし源氏の琴を引

給也 舟へきこゆる也

○心あるかきり 【或抄】 船中の人く也源氏の配所の

御住居をかなしむ也

○そち御せうそこ 【弄】大式を帥といへるは帥の

闕の時は大式か帥の事をとりおこなふ也箒木

卷伊与介とある所に花鳥に見えたり

○いとほるかなる 【細】是より詞也帥は一任の間

五ヶ年也

○まついつしかと 【万水】上洛しては早々と源氏へ祇候

可仕をとの心也

*さふらひて〔10行目〕と（ふらひて）イ 40ウ

○あひしりて 【細】今人しけきゆへに中くまいり

ても人くいかと也

○これかれまで 【孟】京よりまうて来迎たる也

○ことさらにまいり 【細】わさと必可参と也

○子のちくせんのかみ 【弄】大式か子也

○此との、蔵人に 【或抄】源氏の年官に蔵人になし

給たる也 【細】此筑前守は源氏の御恩を深くか

うふりし人也蔵人にも源氏のなし給也されと当

時の事なる故に憚有てと、まらさる也君臣の道

を思へり凡此巻に君臣朋友の道をよくかき

あらはせり源氏は謫居の身なれとも恩賜の御

衣を携て君恩を忘給はず又三位中将は朋友

の信有てすままでくたり給されと物の聞えを憚

ていそき帰給是又君臣の道也

○都はなれて後 【或抄】源氏筑前守にの給詞也

*みやこはなれてのち〔12行目〕源氏詞 41才

○御かへりも 【細】大式か方への御かへりも同前と也

○まかしくしう 【細】狂々也いましくしきなといふか

ことし

○五せちは 【細】源氏へをとつれ申也

○とかくして 【或抄】人まをはからひてとにや

○ことの音に歌 五節也 【万水】源氏の琴の音に

ゆきやらてこゝにたゆたふと也たゆたふはた、

よひやすらひたる心也

○すきくし 【細】こなたより申はさし過たるやう

なるをゆるして御らんせられよと也

○人なとかめそ 【河】古今 いて我を人なとかめそ

大舟のゆたのたゆたに物思ふころそ 41ウ

○はつかしけ也 【万水】源氏の御様体をそはより批判の詞也

【或抄】源氏の御らんするを五節か為はつかしけなると也

○心ありて歌 源氏也 【細】心あらはとまり給へかしと也

○いさりせんとは 【河】古今小野篁 思ひきやひなの

わかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは

○馬やおさに 【河】大鏡第二菅丞相思の外につくし

へくたり給ける時はりまの明石の駅にと、まり給けるに

駅の長いみしく思へるけしきを御覽して作給へり

駅長莫驚時変改一栄一落是春秋 くしとは

口詩也物にもかき付すして口に云詩也 或云句詩

四韻絶句の詩にはあらて一句の詩也下略河委

【花】菅丞相は物もしらぬ駅の長に對してたにも口つ歌を作給へり 五節君は情有人なればなをさりにの給計の事も後まで落とまりぬへくおほゆると也

【弄】花鳥くしとらする古事を以てかけり此物語のおもては五節のつれたる人に源氏の御方にさふらふ人々など物いひ名残おしみなどする事をいへり志の行所なれば口詩にたとへたる也花鳥の義別なり人々の物いひかはしなどするを聞て五節はまして源氏の所に落とまりてありたく思と也

○命婦の君 【細】王命婦也

【或抄】むかしの心しりなれば親子のよしみの深きを思て哀に見奉る也」42才

○春宮の御事を 【或抄】桐壺帝の御子にてなければ也
○御はらからの 【細】源氏の兄弟也

○とふらひ聞え 【万水】すまへ音信など有しと也
○哀なる文を 【万水】源氏のすまより京の人々と詩文とも作かはし給てほめられ給をいへる也

○きさいの宮 【細】弘徽殿也
○いみしく 【万水】悪后以外気色あしくことくしくの給と也

○かうし 【河】考辞日本紀勸事 勸当の事也

【細】直勸をいへり

○此世のあちはひを 【或抄】世の善悪風する事歎

【万水】あつさぬるさをもしらぬとの事也

○おもしろき家居 【万水】源氏すまにての御座所をの給也」42ウ

○かの鹿を馬と 【河】史記曰 趙高欲為乱恐群臣不聽乃先設驗持鹿獻於二世曰馬也二世咲曰丞相

誤耶謂鹿為馬問左右或默或言馬以阿順趙高

或言鹿高因陰 中諸言鹿者以法秦始皇本記

【弄】趙高か乱をおさんとせしを源氏の当今にうしろめたき心あるにたとへて源氏に心をかよはず人々を彼群臣の高に順して馬といひしによそへて今弘後のの給也

○東のたいに 【細】初源氏の御方にさふらひし人々也

【或抄】中將中務などいひし人々也

○なとかさしも 【或抄】源氏の帰京を心長待つけんと思人はこなたにさふらへとてわたし給たれとも紫上の方にはゐられまじきと思しと也

○まめやかなる 【万水】御ねんころの御はこくみ也」43才

○まかてちるもなし 【孟】紫上の心よきゆへに也

○なへてならぬ 【万水】其中にも上臆などには見え給と也

○そこらの中に 【或抄】あまたある中に紫上に源氏の御心さしすくれたるも尤と思也

*すま〔6行目〕住居イ

○えねんし 【万水】紫上をよひくたさんかと也

○うちくしては 【或抄】此住居に紫上を相具して

は似合ぬさまならんと思案をかへ給也」43ウ

○めさましう 【細】此いやしきありさまをまちかく

見給につけて源氏の我身なからかたしけなくおほす也

○おほしわたるは 【或抄】当念にはあらず此間さやう

におほしめしたる心也

○山かつの歌 源氏也 【細】さひたる歌也心はしはく

もこと、ひこなんといはんための序歌也

○すくなかめ 【或抄】虚空は無心なれば此方の心

からおもしろくもすくも見ゆる物と也」44才

○たゆふ 【細】民部大輔也惟光也

○こと物のこゑともは 【細】源氏の琴の音に感したる也

○むかしこの国に 【花】王昭君は胡国の王に嫁せし

事何にも有事なれはことあたらしくするすに不及

こ、には我思人などをかやうの遠国へやりたらいいか

計の事をか思はんとつれ／＼のあまりに今はなき事

なれと京に思給かた／＼のあるにつきてむかしの事を

思なすらへ給也 【或抄】紫上と国をへたて、お

はします心より王昭君かことをいひ出給へり

○霜の後の夢 【河】胡角一声霜後夢漢宮

万里月前腸王昭君朝綱卿

○おくまで 【或抄】軒みしかき屋なれはおくまでも

月のさし入たる也」44ウ

○ゆかのうへに夜ふかき 【或抄】月の更ゆくをいへり

【細】故宮の詩に終夜床底見青天といへるにも

心かよへるにや

○た、是西にゆく 【河】天廻玄鑑雲將霽唯是西

行不左遷首家

【或抄】月は左遷にあらす我は左遷と也

○いつかたの歌 源氏也 【巴抄】月は雲にさまたけら

れてもつゝみにはかくれす源氏はいか、と也月にも

はつかしきとにや

○れいのまどろまれぬ 【或抄】此暁のみならずね覚

かちなれは例といへり

○友千鳥歌 源氏也 【弄】たのもしとは源氏も又

都の人に友なふ事もやと也

○かへす／＼ひとりこち 【孟】きく人もなければひとりこち

給也」45才

* (おほえ) 給へば〔3行目〕けれ(ば)イ

○家にあからさまにも 【弄】すまにての私のやとりへ

の事也 【細】こ、に祇候する人どもの事也

○あかしのうらはた、はひわたる 【花】日本紀八またの

大蛇の事を云に八のをか八の谷にはひわたるとか

けり 蔓延の二字をはひわたるとよめりかつら

などのはひわたるも同事也心は明石浦はすまより

見渡しなるよし也

○かの入道の 【巴抄】くらまにての物語也

○文など 【細】つれ／＼なるま、文をやる也 連々

かよはず也

- ち、の入道そ 【細】むすめの返事はなくて父のかたよりかやうにいふ也
- うけひかさらん 【細】むすめの事をいひかゝりて承引せすはうしろ手もいかにと也」45ウ
- くしいたうて 【花】苦痛也
- 心たかう 【或抄】女を高上に思也
- 国のうちは 【細】国は皆当時の守にこそしたかふなるを此入道ひかめる心は何とも思はざる也
- 【或抄】国の守にえんをむすふをよき事にする也
- 此君 【或抄】源氏也
- 母君に 【細】入道の北方にかたらふ詞也
- あこのすくせ 【河】吾子宿世也
- 【細】入道のむすめの事をいふ
- 此君に 【或抄】むすめを源氏に奉らんと也」46才
- あなかたわや 【万水】母の詞也
- * (御めどもいとおほく) もち〔4行目〕ナシイ
- 御門の御めを 【河】みめとよむへし是師説也日本紀には妃の字をみめとよめり白氏文集にも八十一の御妻とあり但さきのやみことなき御めともいと多とあるをはおほんめとよむへき歟是人臣の故也
- かくもさはかれ 【或抄】左遷にあひ給事也
- はらたちて 【細】入道腹立する也
- えしり給はし 【或抄】入道詞也

- 【細】夢の告あるゆへ也
- さる心をし給へ 【万水】用意ともせられよと母にいふ也
- 心をやりて 【或抄】入道のうれしけなるさまをいふ也」46ウ
- まはゆきまで 【或抄】むすめを置所をけつかうにしなしてむすめをかしつく也
- なとめてたくとも 【万水】いかに源氏の貴人にてましますとも流罪の人にはとの心也
- * などで〔2行目〕母君詞
- さても心を 【万水】さありても源氏むすめに心をと、め給はんこそと也
- いといたくつふやく 【細】入道也
- つみにあたる事は 【河】漢家本朝其例多歟野相公在納言菅家西宮左府帥内大臣以下拔群賢才無辜見配所之月人不可勝計
- わかみかと 【花】伊勢物語にわか御門六十余国とあり我国をいふ詞也
- いかに物し給 【細】北の方の事也源氏へ此むすめをまいらすへき事を庶幾せざるをとかめたる也
- 君そとは北方をさしていふ也
- こ母宮す所は 【弄】桐壺更衣の父は明石入道のお」47才
- ち也大臣の弟也むすめの幸あり後まで余光ありし例を引也

【細】此入道と桐壺更衣といとこ也

○いとかうさくなる 【或抄】俗にきやしやなるといふに心おなし 【孟】ほめたる詞也

○おほしすてし 【細】源氏のおほしすてじと也

○けにやん事なき 【或抄】明石上の事也都のれきれきにもさのみおとるましきと地より云也」47ウ

○身のありさまを 【弄】明石上の心也

【或抄】古受領などのむすめといはれんを口おしく思ふ也

○たかき人は 【万水】貴人などは我を人かすにもおほさしと也

○ほとにつけたる 【花】明石上也大かたは心高き故に我ほどの種姓の人には見えましきと思へる也

○おもふ人く 【或抄】父母にくれたらは也

○尼にもなり海のそこにも 【或抄】若紫巻に此むすめの事をいへる所に此思ひ置つるすくせたかは、海に入ねと遺言したるといひたる首尾也

○年に二たひ 【万水】春秋に住吉へまいらせ給と也

○神の御しるしをそ 【或抄】入道か心也住吉明神の利生をまつと也

○すまには年かへりて 【細】源氏廿六歳也

【孟】是より段を立て云也

○うへし若木の 【或抄】去年うへ給し木也」48才

○二月の廿よ日 【細】去年の此比そかしとおほし出

給也 【或抄】異本三月とあり京を別し時と

いふには三月あへりされともこ、は南殿のさくらの宴の事をいへは二月しかるへし殊に末に三月朔日のはらへの事あり

○心くるしかりし 【或抄】第一には紫上次には花散里などなるへし

○一年の花のえんに 【或抄】花宴巻の事也

○院の御けしき 【万水】桐壺帝の御事也

○内のうへの 【細】其時朱雀院春宮にてましまし、時の事也

○我つくれる句を 【或抄】春といふもしをえてつくり給たる詩の事也」48ウ

○いつとなく歌 源氏也 百敷の大宮人はいとまあれやさくらかさしてけふもくらしつ赤人

【弄】さくらかさし、は花のえんの事也

○人からの 【或抄】宰相人体しかるへき人なるゆへに当代にも時をえ給たる也

○ことの聞えありて 【或抄】須磨へゆきたるとて咎にあは、はあふへしとてすまへ御来臨也

○打見るより 【或抄】源氏宰相たかひに見給ての事なるへし

○ひとつなみたそ 【河】後撰うれしきもうきも

心はひとつにてわかれぬ物はなみた也けり

○住居給へるさま 【或抄】是より宰相の見給様也」49才

○竹あめるかき 【河】五架三間新草堂石階松

柱竹編牆白樂天香炉峯下新山居草堂

○山かつめきてゆるし色の 花鳥の本はゆるし色のきはや

かなるに青にひのうちきさしぬきと云々【花】ゆるし色

のうちき青鈍の指貫といはんとてかやうにかけて

まつ二色を出して後に衣裳の名をあかせりゆるし色は

薄紅を云也青鈍は花田に青けのまされる色也一本

ゆるし色の黄かちなるとありうすき紅の黄なる方に

よれるを云也三善清行請禁深紅衣服奏議云

但淺紅輕黄未及火色者不在制限云々黄かちなる

とは此事也河海に黄衣の証文をひかれたるは誤侍る也

又一本青にひのかりきぬさしぬきとありうちき

をかりきぬとかきかへたる計也心は同じき也

○おまし所も 【或抄】おく深からぬさま也

○碁すく六 【河】囲碁堯造之教丹朱双六孟掌(ママ)

君造之」49ウ

○たきのく 【河】彈碁 後漢書梁冀能彈碁

或者經云彈碁兩人対局白黑碁各六枚先列

碁相当更先彈也其局以石為之下略

【弄】碁盤のやう也 【万水】今の世に石はしきといへる

類也

○物まいるなど 【或抄】御膳の事也

○かいつ物 【河】求食万 かいつ物はかつきしたる物也

或海津物云々能因歌枕云海人のかいつ物とるを

はあざりと云

○そこはかとなくさへつる 【或抄】海士の物いふをあまの

さへつりと云也

○心のゆくゑは 【或抄】世中はとてもかくても同じこと

みやもわらやもはてしなれば あまのき、も

しり給はぬことをさへつるも我思ひをのふる理な

れは異なる事はなしと也」50才

○いけるかひ 【或抄】かいつ物によせある詞也御衣を

給りたるを生前の面目と思と也

○御馬 【或抄】源氏の御馬又は宰相の御馬にても可有

○くらかなにそ 【細】倉屋となる也秣なるへし

かきさま稲とり出なとしてみまくさもよしの心

をとれる類なしと也

○あすかる少 【花】飛鳥井は催馬楽さきに記侍り

馬にいねかふと上にかきたれば御みま草もよしの心

をとれる也

○わか君の 【万水】夕霧の事を宰相の語給なるへし

○つきすへくも 【弄】記者の筆也

○ふみつくり 【或抄】詩も同事也まへにもあり」50ウ

○さいひなからも 【万水】宰相すまへくたり給時たとひ

つみにあたるともとはの給なから京のきこえを憚

と也

○ゑひのかなしひの 【河】醉悲淚灑春盃裏吟苦

支頤暁燭前上下略 【花】白樂天か江州へ左遷

せられし時三月晦日に夷陵と云所に留て元微之に

別し時作れる詩の句也それを今三位中将に源氏

の別給時に思なすらへてもろ声に打すし給也此

詩の心を定家卿韻歌にもろともにくくりあひ

ける旅まぐら涙をそく春の盃

○をのかし、【或抄】すまにさふらふ人くと宰相の御供

とわかれをおしむ也はつかなるとは各くくに相応
の名残おしみすへしと也

○故郷を歌 源氏也 【万水】我はいつか都にかへらん

と也帰雁に中将をなすらへて唯今帰給ふか

うらやましきといへり

○さらに立出ん 【或抄】残多思給也」51才

○あかなくに歌 宰相也 【弄】秋の雁のやうに見ゆ

た、此時の帰さの事をよみ給へる計にや雁をか
りなるにかりてよめり歌の面は雁と可心得也

【或抄】源氏にあかすして別給へは花の都とても
道にまとはんと也

○都のつと 【細】三位の中将の源氏へのみやけ也

【河】おくろさきみつのこしまの人ならば都のつとに
いさといはまし 裏万葉又土産

○ゆ、しう 【万水】左遷の御身にて中将に馬をまいら
せらるゝいまくしきと也

○かせにあたりては 【河】胡馬嘶北風越鳥巢南枝
馬はもと胡国の獣也仍北風にあたれば旧里を慕

ていはゆる也 【弄】古郷を思心あり

○いみしき笛の 【孟】此笛は三位中将のまいらせられたるへし

【或抄】源氏より宰相をくり給也宰相の土産も

源氏のをくり物も人の目にたつ事はえし給はぬと也」51ウ

○いつ又たいめん 【細】源氏の詞也 【或抄】宰相詞也

○さりとてもかくて 【細】三位中将詞也

【或抄】かくては果給はしやかて帰洛あるへしと也
*あるじ「5行目」源氏也

○雲ちかく歌 源氏也 【細】鶴に三位中将を比して

いへり雲井にさふらひ給へきと也われはをさせる

つみもなき身と也 【巴抄】近衛は近きまもりと

いへりくもりなきよしを申給へと也

○かつはたのまれ 【細】我は罪なき身と思へは帰へき

道は必とこそ思へとも昔よりもとのことくに
なる人はまれなると也聖廟などのためしを思へり」52才

○たつかなき歌 宰相也 【花】たつかなきはた
つきなきと云詞也かときと五音通せり又鶴

をかくしてよめる也つはさならへし友は源氏にた
とへ侍り

○いとしもと 【河】拾遺 思とていとしも人にむつれ

けんしかならひてそ見ねはこひしき

○三月の朔日 【河】世風記云 三月上巳桃花水下之

時飲食為嘯招魂請魄弘除不祥 下略河海委
【細】上巳のはらへ也

○なまさかしき人の【或抄】こさかしき人のいひきかせ
奉りたる也俗にいふ物にさし出たる人と云に同

* (うみ) つら [11行目] の (つら) イ

○せんしやう 河委 【弄】一答云軟障と書幕の

やうなる物に高き松などかきて壁にそへて引也」52ウ

【細】ついたちしやうしなどのやうの物也仮名にはせん
しやうとかける本あり只せしやうとよむへし

○此国にかよひける陰陽師 【細】昔は国々に陰陽師

医師ををかれ侍り河海に道満法師の事をひけり

其儀に不及歟

○人かた 【河】人形 【或抄】人形をつくりて悪事を

まつりつけてなかつよし也

○よそへられて 【万水】流人の御身によそへられて也

○しらすりし歌 源氏也 【或抄】人形に一方をかねたり

かなしき事は一方ならずさまくになると也

○さるはれに出て 【細】いよくくもりもなく源氏の

御かたちの見えたる也

○海のおもてはうらくと 【万水】三月朔日時節面白し

* こしかた行きさき [10行目] 源氏心

○八百万 歌 源氏也 【細】祓をし給ての歌也

【河】旧事本紀云 高皇産靈尊召八百万神於」53才

天八湍河之川原 みそきして思事をそいのり

つるやおよろつよの神のまにく 【花】ます鏡

中宮難波の御はらへに大伴皇子歌 とひ見はやあ

まのまし人くさくををさせるつみはありやなしやと

○俄に風ふき 【弄】との給にとかきて即風雨の

変を顕したる心は源氏の只今罪なきよしを詠し

給に感して天変などのさとしありて帰京の瑞

となれる此心なるへし

○ひちかさ雨 【河】いもか門ゆき過かねてひち笠の

雨もふらなんかさやとりせん 笠もとりあへすして

袖かさしたるよし歟但日本紀に大雨をひちさ

め或ひち雨とよめり同心歟

○さる心もなきに 【万水】笠などの用意もなきに

との心也

○又なき風也 【万水】類なき大風と也

【河】周公旦の風雷の変をひけり略之河委

○人くあしを 【或抄】足を地につけすいそくさま也

○海のおもてはふすまを 【花】道成集女院のお前

にて雪のひろうふりて侍しに是をよみてとお

ほせ事あれは年毎に冬ふる物としりながら

とこめつらしきふすま雪哉」53ウ

定家卿明月記云 雨脚融地電光張袞云々

【細】波の白きを云也

○たとりきて 【細】宿へたとり来て也

○けしきつきてこそ 【細】よの常の風はかねて催て

吹事なるを是にはかななる大風也

○雨のあし 【或抄】雨脚地を融と云におなし

○君はのとやかに 【万水】源氏の性を奇特なるとか

けり上根下根のさまを見せたり」54才

○おほしたてつる願の 【細】此風ゆへ願たてたるなるへし

○高塩と 【花】大伴皇子 さてその比波風吹て

高しほといふ物入ていとおそろしく屋とも皆

なかれてしんでんもゆるくいきたなかりける人く

はみなななかにけります鏡の物語にあり

○そのさまとも 【万水】源氏の夢中におそろしけ

なるもの来てなと龍宮よりめしあるにまいり

給はぬそと申也

○さは海の中の 【河】彦火々出見尊海に釣ほりを

失給てわたつみに入て尋給けるを龍神顔容」54ウ

懇絶世たりとめて奉りてむすめの豊玉姫にあはせ

て海童海に三年と、め奉りし也見日本紀下略河海委

【花】是は彦火々出見尊を源氏君にたとへて龍神

の豊玉姫をあはせ奉りしを明石入道のむすめ

になすらへてかける詞也

○此すまゐたへかたう 【細】明石のうつろひ書出すへ

き発端なるへし」55才(須磨巻完)

二、忘れ草、枕を欹つ、琴の声と五節、這ひ渡る

『首書源氏』が最も多く引用している編者未詳の『或抄』の

注釈態度について、片桐洋一氏は次のように言われている(4)。

物語の展開の中にその表現を見ていく態度であつて、考証的に過ぎた古い時代の注釈書とは違つて、物語を楽しんで

鑑賞し、それをわかりやすく説明する態度がはつきり示されて

いている。「休閒抄」「林逸抄」などを含めて、この時代の

注釈書一般に多少は見られる傾向であるが、この「或抄」

こそは、その一つの到達点を示して(後略、傍線筆者)

確かに須磨巻後半に引かれた『或抄』の注も、編者の感想

(36才・39ウ)や俗語訳(47ウ・52ウ)も含め、物語の展開に

即した語句、心情、様子、事情等の説明であり、物語を理解し

鑑賞しやすくしている。更に、「若紫巻に此むすめの事をいへ

る所に此思ひ置つるすくせたかは、海に入ねと遺言したるとい

ひたる首尾也」(48才)は物語の構造、「是より宰相の見給様也」

(49才)は視点、「(生ける甲斐)は)かいつ物によせある詞也」

(50ウ)は地の文における縁語の指摘であり、物語の作りの面

白さへの注目においても他書より進んでいると言えよう。

さて、以下は、『或抄』に限らず注のある語句の中から四つ

を取り上げて、若干管見を述べておきたい。本文及び巻数・頁

数は『新編日本古典文学全集』(以下『新全集』)に拠る(5)。

忘れ草

○やうく忘草も 【河】こふれともあふよのなきは忘草夢

路にさへや生しけるらん古今(28ウ、改行箇所は改めた)

紫上が、死別であれば仕方がなくて忘れることもあるが、限りの無い生別なので、悲しみも果てが無いと嘆く場面である。

ひたすらに世に亡くなりなむは言はむ方なくて、やうやう

忘れ草も生ひやすらん、聞くほどは近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらで、思すに尽きせずなむ。

『新全集』の「忘れ草」の頭注(須磨②一九一頁)には、ゆり科、萱草属の多年生草木。物思ひを忘れさせるとされ

た。「忘れ草生ふ」で、忘れることをいう和歌的慣用表現。とあって、『河海抄』と同じ『古今集』の例歌(恋五・七六六・読み人知らず)を引いている。この解説を補足しておく。

「忘れ草」は歌ことばである。私に恋のつらさ(恋しい人)を忘れさせてくれる草(主に「恋忘れ草」という『万葉集』以来の詠み方が、相手に私のこと(私への恋心)を忘れさせてしまふ忌むべき草(「人忘れ草」という詠み方)に変わった。その変容を象徴するのが、「忘れ草我が身に摘まむと思ひしは人の心に生ふるなりけり」(『小町集』七五)である。以後、「つれなき人の心」に生える(『古今』恋五・八〇一・宗子)、あるいはそれを種として生える(同・八〇二・素性)忌避すべき「忘れ草」が詠まれる。このように、「忘れ草生ふ」つまり忘れるのは自分ではなく相手であり、また、いずれにしても忘れる対象は恋心や恋人であった。それ以外が一般化するのには『新古今集』以後のことで、「浪風の声にも夏を忘れ草日数をぞつむ住吉の浜」(『拾遺愚草』皇后宮大夫百首、夏十首・二二四)などの例歌がある。亡き人に対する追慕の情も恋心と言えなくもないが、この須磨巻の用法は、平安時代の和歌の一般的な「(恋・人)忘れ草」とは別の系譜に位置づけるべきである。

『新全集』の頭注が言うように、確かに「萱草」は、「物思ひ」

つまり憂い一般を忘れさせるものとされてきた。

・合歎のぞかすいかり 怨 萱草忘憂(『文選』卷五二・嵇康・養生論)

・杜康能散悶 萱草解忘憂

(『白氏文集』卷六七・三四〇二・酬夢得比萱草見贈)

・合歎寂院寧獨忿 萱草閑堂反召悲

(『文華秀麗集』卷中・艶情・菅原清公・奉和春閨怨)

これらの影響下にあるのが、次のような歌である。

・萱草吾が紐に付く香具山の故りにし里を忘れむが為

(『万葉集』卷三・三三七・帥大伴卿歌五首の第四首目)

・亡き人を忘れわびなば忘れ草多かる宿に宿りをぞする

(『兼輔集』一〇六・思ひにて人の家宿りけるに、この

家に忘れ草の多かりければ、その家に言ひ入る)

・片時も見て慰めよ昔より憂へ忘るる草と言ふなり(一〇七)

これらの歌は、萱草という実体と結びついている点、憂いが恋ではなく望郷や哀傷である点で漢詩文的である。「忘れ草も生ひやすらん」は、寧ろこちらの系譜にある。特に『兼輔集』

の歌は死別のつらさ、亡き人を忘れるという点で、共通している。兼輔の歌が須磨巻の他所でも踏まえられていることは、知られる通りである(27才『貫之集』七三〇・初句「君惜しむ」、31才参照)。「生ふ」の語があることから、『古今集』歌などの和歌の表現をある程度踏まえることは確かだが、漢詩文やそれらの原義に近い『兼輔集』の歌も参照すべきであり、和歌の「忘れ草」と漢詩文の「萱草」とを融合した表現だと言えよう。

枕を欵つ

○枕をそはたて、【花】白楽天詩遺愛寺鐘欵枕聴（36才）

「欵枕」の「欵（≡欵）」には倚りかかる、斜めにもたれるの意があり(7)、右の白詩句（『白氏文集』卷一六・〇九七八・題略・連作五首の第四首目）を含め、本来、安閑・安眠の境地を表す熟語であり(8)、「枕に欵る」などと訓むべきであった(9)。

しかし、『源氏』の須磨卷や総角卷（右の白詩句の引用ではないが柏木卷にも）を初めとして、「枕を欵つ」と訓まれ、逆に心身共に不安定で充足感を得られぬことを表す語句として用いられてきた。こうした「物思ひ」を表す用法は、「誰憐独欵枕」斜月透窓明（『元氏長慶集』卷一四・晚晴）の「眠れぬ夜の輾転反側」を表す例もあり、「五代から宋へと、とくに詞の分野では元稹と同じ方向に用いた場合が多い」(10)ので、日本文学独自のものではないが、白詩の圧倒的な影響にも関わらず、充足・安定を表す「欵枕」から離れていく傾向があることは、日本文学の特徴と言えるだろう。この傾向は、嵯峨天皇の「江頭亭子人事睽 欵枕唯聞古戍鷄」（『文華秀麗集』卷上・遊覧・江頭春暁一首）や「欵枕山風空蕭殺 横琴溪月自逍遙」（『経国集』卷一三・雑詠三・山居驟筆）にも無いわけではないが、道真の詩以来明確になった。特に次の七言絶句の例は、帰京を希求しても得られない、悠なる望郷の悲哀が顕著である。

我為遷客汝來賓 共是蕭蕭旅漂身

欵枕思量歸去日 我知何歲汝明春（『菅家後集』聞旅雁）

この詩は、『異本紫明抄』が光源氏の宰相中将に詠んだ「ふ

る里をいづれの春か行きて見んうらやましきは帰るかりがね」（須磨②二一五頁）の出典とし、今井源衛氏がそれを認められ(11)、『新全集』でも出典とされている。しかし、この歌だけでなく、「欵枕」に託された「物思ひ」、望郷の念を考慮すると、「枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに」（須磨②一九九頁、36才）の出典としても、指摘すべきではないか。

最初に掲げた白詩句だけでは出典として不十分なことについても、今井氏の指摘がある（『完訳日本の古典』卷末評論）。氏は『扶桑集』の橘在列の二例の「欵枕」も挙げた上で、

この時代には「枕を欵てて」の語は、こうして王朝詩檀の常套語と化していたことにも留意する必要がある。次に続く「四方の嵐を聞きたまふに」と合せれば、嵯峨天皇の「山居驟筆」の詩句にもそれは似通ってこよう

と言われている。更に「琴」という共通点もあるのだが、「物思ひ」を重視すると、道真詩との共通性のほうがより大きい。

須磨卷が、白居易の詩文と同様に、所々で道真の事跡や詩を踏まえていることは、言うまでもない（30ウ、39才、40才、42才、45ウ、52才参照）。このような道真との関係の深さや、「欵枕」の心象の共通性から、『菅家後集』「聞旅雁」を、既にこの「四方の嵐」（秋風）を聞く時点で、背後に見ておきたい。

琴の声と五節

○きんのこゑ 【或抄】おりふし源氏の琴を引給也 舟へき

こゆる也（40ウ）

光源氏が弾く琴の音が、「帥」（大宰大貳）の娘の「五節」（花

散里②一五五頁では「筑紫の五節」のいる舟にまで、「風につきて遙かに聞こえ、心あるかぎりみな泣いたという（須磨②二〇四頁）。そのことがきつかけとなつて、帥からの消息と息子の筑前守の訪問があり、次いで五節自身が、「琴の音にひきとめらるる綱手繩……」（同二〇五頁）の歌を贈つた。

しかし、光源氏の住まいは、「海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中」（同二一八七頁）ではなかつたか。確かに「海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえ」（同二一九八頁）たのだが、いくら秋風が媒介するといつても、波音と琴声を同列に扱えるのだからか。物語の設定は、やや不自然であるように思われる。

遙か遠くまで聞こえる不思議な琴声については『宇津保物語』との関連もあるが、貴人の弹琴と五節との結びつきという点では、『年中行事秘抄』十一月所引の維宗公方編『本朝月令』に見られる五節の舞の起源伝承が想起される（私に訓読した）。

本朝月令云はく、五節の舞は浄御原天皇（天武天皇）の製する所なり。相伝に云はく、天皇吉野宮に御し、日暮れに琴を弾くに興有り。試楽の間、前の岫かの下に雲氣忽ちに起る。疑ふらくは、高唐の神女の如きかと。髣髴として曲に应じて舞ふに、独り天瞻にのみ入りて、他人は見る事無し。袖を拏ぐる事五変。故に之を五節と云ふ、と云々。

『本朝月令』そのものを作者が見たわけではないだろうが、この伝承を知っていた可能性はある。これを踏まえたのだとしたら、帝王に相応しい人物の水辺の異郷での弹琴は、他ならぬ

五節の舞姫に聞こえる必然性があつたわけである。

這ひ渡る

○あかしのうらはた、はひわたる 【花】日本紀八またの

大蛇の事を云に八のをか八の谷にはひわたるとかけり 蔓延の二字をはひわたるとよめりかつらなどはひわたるも

同事也心は明石浦はすまより見渡しなるよし也（45ウ）

『花鳥余情』は、「はひわたる」の表記や意味の説明の為に、『日本書紀』卷一・神代上・第八段「大蛇有り。頭・尾各八岐有り。（中略）松柏、背上に生ひて、八丘・八谷の間に蔓延れり」を引くが、結局ここでは距離の近さを表すのだと結論する。「八またの大蛇」は、『源氏』の内容とは無関係なのだろうか。

『新日本古典文学大系』の索引に拠ると、「這ひ渡る」の語は十一例あるが、距離の近さを表すのは次の二例のみである。

A 明石の浦は、ただ這ひ渡るほどなれば、良清朝臣、かの入道のむすめを思ひ出でて文などやりけれど、返り事もせず、父の入道ぞ（後略、須磨②二〇九頁）

B 例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただ這ひ渡るほどは片時の間といへど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。（明石②二三三頁）

この用法は『蜻蛉日記』上巻・康保四年十一月条の「乗物なきほどに、はひ渡るほどなれば」のように他にもあるが、そのことは、近さの表現以上の意味があつたことを否定しない。

Aは、若紫巻以降初めて明石一族が登場する場面である。彼らは「海竜王の后になるべきいつきむすめなり」（若紫①二

○四頁)以来、『花鳥余情』の引く「海竜王」に奪われた王女の話(「吉祥天女の本縁」)や『日本書紀』卷二・神代下の彦火火出見尊(山幸彦)の神話、中国の竜宮伝説・水神伝説、兼明親王の祈願による小倉山荘の霊泉湧出の史実等々を踏まえつつ、水神・水族(龍・亀・蛇等)のイメージを担ってきた¹³⁾。

更に伊藤博氏は、上巳に始まる暴風雨の中で「超越的な力を示した靈威が微妙に連携を保ち交錯しつつ、海神ないし水神的イメージを持つこと」を指摘されている¹⁴⁾。即ち、住吉の神(筒男三神)は海神で、「筒」は蛇体との説もあり竜と同じく水を司るもので、「海神としての竜王と重なる」。桐壺院の靈も「海に入り、渚に上り」(明石②二二九頁)と「竜蛇のイメージをかいま見せ」、雷・暴風雨・高潮は「水神の跳梁の顛れ」であり、「辰の月」の三月の上巳(三日)と十三日という「巳の日」、つまり「蛇神の日を軸に靈力が発動した」のであった。上巳に光源氏の夢に出てきた「海の中の龍王」(須磨②二一九頁、55才参照)からの使者とおぼしきモノは、一方では明石入道の夢の中で、十三日に光源氏を迎えにいくよう指示していた(明石②二二二頁)。その十三日、祈願により暴風雨・高潮・雷鳴が収束した後、「助けに翔り」(同二三〇頁)夢に現れた桐壺院の靈に須磨浦を去るよう命じられて、光源氏は「暁方」の入道の迎えに従い、明石に到着する。それが、前掲Bである。よって、「はひわたる」の語は、単に距離の近さを表すだけでなく、「龍王」を含めた水族の縁語としても用いられたのではないか。「渡る」が延びていると移動するの意味の違いはあ

るが、八岐大蛇の用例に拠ると縁語だと言えよう。奇稻田姫と明石の君など両者の内容的な関連もあるうが、この神話に注目することで、『源氏』の用語選択の方法が明らかになると思う。

注

- (1) 清水婦久子氏編『首書源氏物語 総合・松風』(和泉書院、一九八九年)の解説。
- (2) 私に、須磨に到着してからの「おはすべき所はゆきひらの中納言の(25才)」以降を後半とした。拙稿『首書源氏物語 須磨』の頭注の翻刻と小考察(上)―山陵参拝と『白氏文集』の諷諭詩―(『札幌国語研究』五、二〇〇〇年一月)を参照されたい。「御はかは道の草」(20才)の出典とすべき「古墓何代人、不知姓与名、化作路傍土、年年春草生」(『白氏文集』卷二・〇〇六六・続古詩十首の第二首全14句中9・12句目)は、「罪無くして配所の月を見ばや」(25ウ、47才参照)と共に、後一条天皇崩後に出家した権中納言顯基(醍醐源氏)が常に口ずさんでいた句として知られることを付言しておく。『古事談』卷一・四七、『袋草紙』上巻・雑談、『発心集』卷五・九九、『十訓抄』六ノ一一と九ノ四等。
- (3) 本文の性格については、注(1)の清水氏が「『首書源氏物語』の本文―同時代の版本との係わり―(片桐洋一氏編『王朝の文学とその系譜』和泉書院、一九九一年)で、従来指摘されていた、青表紙本系統の三条西家系統の本文に近いが河内本系統の本文も含み、『湖月抄』と非常に近いという特徴が、

実は同時代の版本一般に共通するものであること、最終的には、貞徳の指導によって成った「絵入源氏」の万治三年版横本『源氏物語』を底本とし、承応二年貞徳跋の版本『万水一露』を校訂に使用したと考えられることを、明らかにされた。

(4) 片桐洋一氏編『首書源氏物語 総論・桐壺』（和泉書院、一九八〇年）の解説。

(5) 歌集は『新編国歌大観』に拠る。私に一部漢字に改めた。『日本書紀』『蜻蛉日記』は『新全集』、『経国集』以外の日本漢詩集は『日本古典文学大系』、『文選』は『全釈漢文大系』、『経国集』『年中行事秘抄』は『群書類従』。『白氏文集』は那波本を新字体に換え、作品番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年）に拠った。

(6) 以下、拙稿「忘れ草攷」（藤岡忠美氏編『古今集解環』和泉書院、一九八九年）及び「忘れ草攷―補遺（一）」（『国語国文学研究論文集』四二、一九九七年三月）に基づく。

(7) 『漢語大字典』、次いで『漢語大詞典』。松浦友久氏『万葉集』という名の双関語（かぎことば）（大修館書店、一九九五年）。

(8) 埋田重夫氏「遺愛寺鐘欵枕聴」考―白居易の詩語が意味するもの―（『中国文学研究』一四、一九八八年二月）。

(9) 以下、拙稿「白詩語「撥簾」受容考―菅原道真を中心に―」（『和漢比較文学』一三三、一九九四年七月）に基づく。

(10) 岩城秀夫氏「遺愛寺の鐘は枕を欵てて聴く」（『国語教育研究』八、一九八八年二月）。

(11) 今井源衛氏「菅公の故事と源氏物語古注」（『紫林照徑―源

氏物語の新研究』（角川書店、一九七九年）。

(12) 石川徹氏「光源氏須磨流謫の構想の源泉―日本紀御局新考―」（『国語国文学報』一二、一九六〇年一月、『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九年）、新聞一美氏「源氏物語と廬山―若紫卷北山の段出典考―」（『甲南大学紀要（文学篇）』五二、一九八四年三月）、浅尾広良氏「中務宮と明石物語―「松風」巻の表現構造―」（『中古文学』三八、一九八六年一月）等。『新全集』若紫卷①四四五頁参照。

(13) 注(12)石川氏は明石入道「龍王」とされ、「海龍王」―光源氏を否定する東原伸明氏は明石君に「龍女のイメージ」があると言われる（『源氏物語と明石』の力）『物語研究第二集』、新時代社、一九八八年）。また、池浩三氏は「易」に拠り明石君（六条院では「乾」）に「竜」を当てられている（『光源氏の六条院―そのかくされた構想―』『中古文学』四八、一九九一年一月）。四神の玄武との繋がりもあるか。なお類書や『搜神記』所収の水族の女性の伝承については、項青氏「亀が女になる話―浦島伝説の源流」（『アジア遊学』No.2 特集「不老不死という欲望」）勉誠出版、一九九九年三月）が詳しい。

(14) 伊藤博氏「明石の一族との出会い」（『國文學』三三二―三三三、一九八七年一月）。但し住吉神の「筒」は星ゆえに桐壺院の靈（―北辰―北極星）と緊密なのであろう。拙稿「源氏物語の道教・陰陽道・宿曜道」（増田繁夫氏他編『源氏物語研究集成』6 源氏物語の思想』風間書房、二〇〇一年）。